

滋賀県のがん登録

小川 美佐子
滋賀県衛生科学センター 健康科学情報担当

1. 歴史と組織

滋賀県のがん登録事業は、昭和 44 年に実施主体としては県健康福祉部、登録実施機関は県立成人病センター健康管理部、届出業務は県医師会に委託し「全がん患者登録管理事業」として開始しました。

その後、昭和 57 年に電算処理開発を行い、集計方法を「厚生労働省がん研究班」の地域がん登録標準集計方式に改め現在に至っています。

開始当初は、がん登録のリーダー（医師）が中心となって行われていましたが、平成 7 年にリーダーが退職された後は、実務者のみとなり、担当職員（保健師または看護師）1 名と日々雇用職員 1 名で行って来ました。実務の指導、助言は、成人病センターの診療情報管理室長であった西本寛先生（現在国立がんセンターがん予防・検診研究センター勤務）に平成 15 年から平成 16 年までお世話になり、また大阪府立成人病センター「地域がん登録研究班」の先生からもご指導をいただくという状況でした。そのような状況で、30 年以上成人病センターにおいて行ってきましたが、今年度より、県の組織改編により「地方衛生研究所」である滋賀県衛生科学センターで行うことになり、新設された健康科学情報担当の 1 つの業務として位置づけられました。健康科学情報担当のスタッフは、職員 6 名（化学職（グループリーダ）1 名、臨床検査技師 1 名、保健師 1 名、看護師 2 名および事務職 1 名）と日々雇用職員 1 名の計 7 名で、感染症発生動向調査、地域がん登録、がん検診精度管理、衛生統計調査などの業務を行っています。また、本年度から滋賀県健康危機管理情報センターが当センターに機能設置され、その中心的担当として健康危機管理情報の収集と提供を行っています。

2. がん登録の現状と課題

滋賀県の人口は、約 138 万人（平成 17 年 10 月現在）

で、年間のがん死亡数は約 3,000 人です。県内の保健医療圏は、7 つに分けられ、61 の病院（うち一般病院 46）と約 700 の診療所（医師会員）があります。平成 17 年のがんの届出数は、23 の病院から 4,127 件、44 の診療所から 255 件あり、また、出張採録数は 1,600 件です。全体の届出数に対する出張採録数の割合は約 3 割強になっています。

本県では、平成 11 年より出張採録を開始し、毎年、1~2 名の職員が 3 施設を対象に約 15 日間（その年の集計対象年の情報を採録）行っています。届出精度の指標である DCN 割合は、1996 年までは、40% 台と低い結果でしたが、その後改善傾向にあり、2002 年には 26.8% と、登録開始以来始めて目標値（DCN 25~30%）を達成しました。この要因には、出張採録や地域がん診療連携拠点病院（現在 3 施設）の院内がん登録からの届出増があげられます。今以上に届出精度を向上させるためには、出張採録の病院数を増やすことが必要ですが、マンパワーなどの問題があり現状を維持することが精一杯の状況です。各関係機関への PR 等の強化を図ることは勿論ですが、県内医療機関（地域がん診療連携拠点病院以外の一般病院）に院内がん登録システムの整備、普及を図り支援できるような体制整備が必要ではないかと痛感しています。

3. がん登録資料の活用

本県のがん登録の精度は年々向上していますが、「がん予防対策」や「がん医療水準の向上」を講じるための基礎資料としての活用までには至っていません。しかし、今年度、滋賀県個人情報保護審議会の答申により、公表された情報以外のがん登録資料の利用が可能となりましたので、多くの研究者の方にご利用いただけたと思います。また、当所のホームページにもがん情報を掲載し、県民への情報還元を行っていきたいと思っています。

4. 終わりに

今年度、「がん罹患・死亡動向の実態調査の研究」祖父江班の大口支援をいただき、標準化システムを導

入ることになりました。現在、8月末に広島放射線影響研究所にデータを提出するため、移行用の既存データの整理を行っている最中です。システム導入後は、生存率の算出 がん検診の有効性の評価に関する調査を行い、がん部会や県民への情報提供を行って行きたいと思っております。地方衛生研究所でのがん登録事業の実施は希ですが、沖縄県でも実施されていますので、お手本にさせていただきながら今後も努力していきたいと考えています。

村田紀先生を偲ぶ

三上 春夫
千葉県がんセンター研究局疫学研究部

平成18年3月14日、前千葉県がんセンター研究局疫学研究部長、村田紀(もとい)先生が永眠されました。享年67歳でした。先生は数年前より闘病生活を続けておられましたが、その間にも毎週疫学研究部にお見えになり、衰えることのない研究への情熱をもって私たちを励ましてくださいました。昨年7月末に肺炎を併発され千葉県がんセンターに入院されましたが、ついに回復されることなく、先生がこよなく愛された桜の季節を前に永眠されました。先生とは不思議なご縁で疫学分野の仕事をひとときご一緒させていただきました。その早すぎたご逝去の無念を想い、深く哀悼の意をのべさせていただきます。

村田先生は京都大学農学部で遺伝学の木原門下に学び、昭和38年同学部を卒業されました。修士課程を経て、先に就職していた同門の先輩の紹介で、昭和40年5月放射線医学総合研究所遺伝研究部(千葉県)に就職されました。昭和41年にご結婚された後、昭和47年に米国テキサス州ヒューストンにあるテキサス大学遺伝学研究所に派遣が決まり、ご家族を伴い留学されました。当時盛んになった集団遺伝学について研究を深められる傍ら、他の研究者と家族ぐるみの交流を通じて、お得意のケーキ作りをものにされたのも

この時期であったようです。

昭和48年の帰国後、それまでの遺伝学の研鑽を医学方面に生かすことを考えていたおり、千葉県がんセンターの初代センター長福間誠吾先生に請われて地域がん登録に携わることとなりました。しばらく放射線医学総合研究所と千葉県がんセンターの二足の草鞋を履いた後、昭和58年に千葉県がんセンターに疫学研究部長として着任され、平成12年に退職されるまで、千葉県がん登録の精度向上のために県内を行脚されました。登録業務と並行して、先生は染色体異常や家族性腫瘍に関わる研究を進められ、また早くから疫学データ処理へのパーソナル・コンピュータ導入に取り組みました。平成9年には千葉市において「がん登録とコンピュータ」をテーマに第6回地域がん登録全国協議会総会研究会を開催されました。

千葉県がんセンターを退職後、先生は放射線影響協会の疫学センター長を勤められました。自由になった時間を趣味の謡(うたい)に充てることできるようになり、疫学センター長を退職されてからは、一門を主宰しておられました。ある時、村田先生が退職パーティーのおり披露された大曲『山姥』について伺う機会がございました。山の精が深山幽谷を不羈奔放に駆けめぐるといふ、世俗を超越した存在の有様を謡ったものだと仰りました。その言葉に、飄々とした風貌、恬淡として日本酒を愛し、時に鋭く本質を一言に語る先生の生き様を伺ったように想ったものでした。合掌。

村田先生のこと、懐旧の情

岡本 直幸
神奈川県立がんセンター

村田先生とは、先生が放射線医学総合研究所に在籍しておられた昭和55年の地域がん登録の藤本班班会議で初めてお会いしました。実は、お会いする前から、放射線生物学がご専門で、わが国で早い時期から SCE (Sister Chromatid Exchange) 研究をされていたことは承知していました。あれから25年になるでしょうか、